

それでも 希望は 労働運動

ハ・ジョンガン著

この本は民主労総・公共運輸労組・全北本部長の李昌錫（イ・チャンソク）さんが、全日建・トラック支部の土屋政近さんに贈呈したものです。土屋さんは「ヨギョ。メツチュ ジュセヨ（こちら。ビール下さい）」以外の韓国語を知らないのので、私に託したものです。全部で370頁もの厚い本ですが、気の向くままに紹介していきます。

ハ・ジョンガンの『それでも希望は労働運動』は
労働問題を自らの問題ではないと考えている
労働問題に対する理解が特別に深くない
そんな普通の人たちを対象にした本です。

労働者でありながら自分は労働者ではないと思っている人たち
家族の中に労働者がいるのに
労働問題は自分とは別の、関係のない問題だと思っている人たち
労働問題は民主労総・韓国労総だけの問題だと思っている人たち
労働運動は労働者にとってだけ有益で
社会には有益ではないと考えている人たち
そうではあっても
自分は客観的で合理的な思考をしようとする人たち……
そのような人たちが偶然にこの本を読んで
『あー、このように考えることもできるな』と
理解できるようにしようという思いで構成しました。

ハ・ジョンガンは1955年に仁川で生まれ、1年の300日以上を全国各地を回って労働教育をしています。

現在は、ハンウル労働問題研究所所長、ハンギョレ新聞客員論説委員、ソウル地方労働委員会の公益委員、ソウル中央地方裁判所の調停委員、仁川大学講師、韓国労働教育院客員教授、労働者教育センター教育委員などを務めています。以前には仁川キリスト教都市産業宣教会実務者、(社)韓国産業安全保健教育研究センター所長、ハンギョレ労働教育研究所の研究員などを経験しました。1994年に「余りに遅くなって出会った人たち」（「いつも胸が震える初めてです」）で、第6回全泰壺文学賞受けたことを、人生で最も大きな栄光だと言っています。

出版にあたって

江原道の農工団地の、ある中小企業の労働組合が団体交渉をしながら、何回か訪ねて来ました。その労働組合の交渉部長はいつ見てももの静かで、温和しい印象のかたです。言葉も温和しく、今まで怒ったことがない人です。頭に「団結」「闘争」と書かれた赤い鉢巻きを締めている交渉部長に、冗談半分真面目半分で訊きました。

「交渉部長さんはどう見ても闘士のようにではなくて、本当に物静かで温和しい印象なのですが、どのようにして労働組合の幹部をするようになったのですか？」

交渉部長は物静かな口調で答えました。

「私は小さい時から……なんと言うか、その……正しいことをしたかったのですよ。学校に通っている時も、勉強をシッカリやって級長になるのではなく……人前に出て偉ぶるのではなく……他の人の助けになる何か少し良いこと、正しいことことをしながら生きたかったのです」。

洗練された言葉使いではありませんが、訥々と話す交渉部長の顔を、私は真っ直ぐに見ることができませんでした。いつもこのように、洗練さと正しさは関係がありません。

私が会った労働者にはこのような人がたくさんいます。このような人たちが労働組合の活動を始めます。マスコミが『集団利己主義』だと非難しても、労働者の中にはこのような人がたくさんいます。

うかつにも労働問題に関する仕事を職業に選んでから、20年を超える歳月が流れました。今のように、労働者の権利について話すのを注意したり、難しさを感じる時期はかつてありませんでした。『労働組合』とか『労働条件』といった極めて平凡な単語ですら、密かに息を殺してつぶやかなければならなかった1980年代の『暗黒の時代』でも、今のように難しくはありませんでした。朴正熙から盧武鉉大統領に至るまで、全部で6人の大統領を経過する間のそのどの政権でも、今のように労働者の権利を擁護するのが難しい時はありませんでした。

人はほとんど、障害者の権利が拡大されることは正しいと考え、女性の権利が伸張することもやはり正しいと考えます。これが我々の社会が進歩する方向だと考えます。そのように考える人たちも、労働者の権利が今よりもっと高い水準に拡大され、労働者の賃金が引き上げられることは、社会に有害だと考えることが多いのです。特に『国家経済』に害を与えると考えます。もう少しよく考える利口な人は、厳しい差別を受ける零細な下請け業者の非正規職の権利が今よりも拡大されるのは正しいけれども、大企業の正規職労働者の既得権が今よりは下げられることが、韓国社会に唯一の道だと考えます。それが『国家の経済力』を育てる道だと考えます。

果たしてそうなのでしょうか？ ひょっとして、韓国の労働者たちの権利は、正常化される前まで、よく言われる『グローバルスタンダード』に達する前まで、後ずさりしているのではないかと。人々にこのような話しをしたいのです。

ある市民社会団体の会員を対象にした講演を終えて出てきたところ、3・4人の人が入り口に集まって私を待っていました。図書出版の「フマニタス出版社」の職員だと自己紹介をしました。粗末な事務室の隅に座って少しの間話をしましたが、私の文章を集めて本を出したいということでした。私はとても忙しくて、とても原稿を整理する時間がないと言いましたが、自分たちが私の文章を集めて原稿を準備する仕事をするからと……。既に一冊分の分量の文章を集めて、すべての職員たちが順番に読んで、それらしく製本された本を一冊差し出しました。

話をした時間は30分ほどにしかありませんでしたが、『80年代の献身性』を感じられる人たちでした。「今でもこのように仕事をする人がいるんだな」と思いました。

それから何日か後、一包みの原稿の束を受け取りました。私が『承諾』すれば、直ぐに本として出せると言いました。よく見るとインターネットに気楽に挙げた文章と、放送で自由に喋った言葉が原稿のほとんどで、本として出すには恥ずかしい内容も多かったのですが、私が直接手を入れようとすると何時になるか分からないので、そのまま出すしかありませんでした。

敬語で書いた文章とぞんざいな言葉で書いた文章が混じっていて「これだけでも一つに統一するのはどうか？」と言いましたが、「このまま自然に、このままにするのも良い」と言われました。本の序文を少し書いてくれと言うので、私の狭い考えで「推薦の言葉の一つも貰わなければならないのでは？」と言いましたが、「そんなことはない、このままあっさりとお出そう」と言われました。

こうしてこの本が世の中に出ることになりました。

顔を背けたいほど恥ずかしいことがたくさんありますが、『自然に』と『あっさり』という言葉の後に隠れることにします。

2006年5月1日
メーデーの明け方に
ハ・ジョンガン

労働運動を批判しようとするなら

『王になった男』(註)と綱渡りの扇

註) 『王になった男』は、イ・ビョンホンが初めての時代劇で一人二役に挑み、韓国で1000万人を超える観客を動員した大ヒット作。実在した李氏朝鮮の第15代国王・光海の史実とフィクションを交え、理性を失った暴君の影武者になった道化師が、真の王として目覚めていく姿を描く。1616年、朝鮮王朝15代国王・光海は、王位を狙う者からの暗殺を恐れ、次第に暴君と化していく。一方、王と瓜二つの顔立ちで、墮落した国王の風刺劇を演じていた道化師ハソンは、宮廷に連れて行かれ、光海の影武者に仕立てあげられる。王としての振る舞いや宮廷の生活に慣れるに従い、政治のあり方に疑問を抱き始めたハソンは、やがて政治の場で自ら発言を始める。

時代劇の枠を壊したという新鮮な評価を受ける映画、『王になった男』が観客1000万人を突破しました。我が国の国民の4人に1人がこの映画を観たということになります。未だこの映画を観ていない人は、それほど生きていくのが辛く、苦しいという意味です。

王が登場する時代劇でありながら、歴史の片隅に疎外されていた役者たちが、最後までこの映画の主人公です。ある批評家は「歴史から疎外された非主流(役者)の立場から主流(王)の歴史をのぞき見た」と賞賛しながらも「役者たちの自由な魂に関する話しが、何故この時代に必要なのか、これを明らかにしてくれなかった」と、残念さを現してもいます。

旅芸人で綱渡りの妙技をする人を「綱渡り」と言いますが、特に綱渡りの達人を「綱渡り仙人」と呼びます。「仙人」というのは人間と神の間という意味です。現在我が国には『綱渡り仙人』は7人しかいないと言います。昔は当代最高の「綱渡り仙人」が村に入ってきたり表通りを通りかかると、他の旅芸人たちはみんな旗を下げて尊敬を表すようなこともしたと言います。

だいぶ前に、ある「綱渡り仙人」を紹介する記事を読んだ私は、この一説にふと首を傾げました。何万人もの労働者が集まる労働者大会で、その年で最も熱心に頑張った労働組合の旗が入場するとき、他の労働組合がすべて旗を下げて、敬意を表現する場面が思い浮かんだからです。

映画『王になった男』の記事を読みながら、私は30年ほど前に通っていた大学の学生部長の教授が思い浮かびました。私が大学に入った年は、維新独裁が活潑に勢いを振るっていた74年でした。その頃、いわゆる「人革党再建委」事件が起きました。「死刑」は判決だからといっても、むやみに執行できるものではありません。韓国には今、50人を超える死刑囚がいますが、10年間、死刑の執行はありません。ところが、朴正熙独裁政権は、「人革党再建委」事件の関連者8人に死刑の判決を行った後、翌日の早朝に直ちに執行してしまいました。前の日に法廷で裁判を見守った家族が、次の日の朝早く慰労のために刑務所に面会を行って、死体を抱きしめて泣くしかありませんでした。

鍾路5街、キリスト教放送局の2階の講堂で行われた祈祷会に参加した「人革党再建委」事件の関連者の家族が、私服警官に引きずられながら「人革党はでっち上げだ！」と叫んでいた姿が、今も目に浮かびます。その金切り声の絶叫が、今も耳に鮮やかです。その時に新婚だった若い女性が最近テレビに出ているのを見ましたが、本当にハルモニになられていました。

大学2年生だったある日、何のためだったか細かくは覚えていませんが、言い争いをしていた学生部長が私に問い質すように聞きました。

「お前は朴正熙は悪いという話は一所懸命するのに、なぜ、金日成の悪口は一言も言わないのか？ 公平ではないのではないか？」

みなさんはそのような質問を受けてときに何と答えますか？ 私はこのように答えました。

「金日成を非難する話は私たちの社会に溢れていませんか？ しかしながら、朴正熙がどれほど悪いことをたくさんやったかは、人々はほとんど知っていないじゃないですか。ある朝突然、絞首して8人もの貴い命を奪ったのに、誰かが学生に、市民に、そのようなことが起こっていることを知らせる必要はありませんか？ だから私のような者が全身全霊を傾けて、朴正熙が行った悪事を世の中に一所懸命に伝えても、我が社会の均衡を取ろうとするには、まだまだ足りないのです」。

映画『王になった男』を見ながら、なぜ30年前のこの日のことを考えたのでしょうか？ 綱に乗る芸人は手に一つの扇を持って、ひょいと綱の上に上がります。そして、この芸人の扇はいつも芸人の体が傾く反対側でのみ拵げられます。「私は、あっちこっちのどちらにも偏らず、常に公正に、客観的に、中立を維持します」と、利口ぶって扇を中央にだけ拵げると、直ぐに綱から落ちてしまいます。

私たちの社会に氾濫している両方非難論のほとんどが正しくない理由は、そういうことです。「両方に責任がある」という両方非難論は、公正で客観的な態度を維持したという満足感を与えるだけで、無責任になることが多いのです。針の先ほどでも正しい方があれば、その方を選ばなければなりません。

ある人は「あっちもこっちも、どちらも選ばない」のが、まともな教養人が備えるべき「中庸」の美德だと言います。しかしそうではありません。「針の先ほどであっても正しい側に立って、行き過ぎてはいけない」と言うこと。それが私たちの祖先が教えた中庸の美德です。

一方は強大な資本と権力で武装した資本家たちで、もう一方は素っ裸でしかない労働者なのに、その間で中立を維持することは不可能です。労働組合を弾圧する誠実な人柄の人事労務管理者は、会社の立場から見れば忠臣ですが、歴史の前では罪人にならざるを得ない理由は、そのためです。

ずっと以前に、私が「テファン兄さん」と呼んで慕った人、自ら良心的な知識人だと思っているキム・テファン教授が労働部長官になった後に、労働界の退陣要求を受けざるを得なかった理由もそれです。社会全体が経済に「オール・イン」する雰囲気の中で、他の大臣のすべてが全員一致で企業的な考えをする国で、労働部長官さえもが中立的な立場に立つ？ それは最終的には強い者の味方ということに他ならない。

資本家と労働者の間で中立を維持するということは不可能なことです。「私の言葉と行動は、どちらに拵げる扇か？」 いつもそんな考えを持ちながら生きていければ良いと思います。

労働運動を批判しようとするなら

労働運動を批判する時には……

労働問題に関心のある人であれば、最近あるインターネット・メディアを介して展開されている労働問題に対する甲論乙駁を見守っています。かつて労働運動に身を置いていた一人の社会運動家が、「現在の韓国の労働運動は、大企業・正規職中心の既得権勢力に売り渡されており、『王子病患者』になりながら、擁護してくれるどのような社会勢力もなく、孤立無援の状態に閉じ込められているのが実状」と、叱咤しながら始めたこの論争は、多くの人からの反論と再反論が続きながら、関心を呼んでいます。

労働運動が墮落したと言わざるを得ない具体的な例が幾つか示されることもありました。一部の労働組合の幹部たちのそのような様子を、私も時々見るがあります。ひょっとすると、私は労働者たちのそのような「無様な姿」を最も多く見た者かも知れません。それだけでなく、非正規職労働者、零細・下請け業者の労働者、田舎の労働団地のビニールハウスと大差のない古びた工場で働く労働者、ハナから労働者と認められない特殊雇用職の労働者とも、最も多く会った者かも知れません。

昨日一日だけでも、朝の早い時間に公務員の労働者と会い、昼には病院の労働者と会い、午後には公共部門の大企業の労働者と会い、夕方の中には地方の郡庁舎で働く非正規職の労働者と会いました。今日もそのようにして会い、これからも引き続き会うことでしょう。今は大学生たちと労働問題を話すために、地方のある大学に向かっているところです。

朝会った公務員労働者からは、「活動家の何人かが必死になって引っ張って行っている公務員労働組合に加入することが、何故この上なく当然で、自然なことか」について、一所懸命に説明しましたが、数十年の歳月の間に「労働運動は韓国社会に有害だ」という認識に浸っているその公務員は、なかなか同意できないという表情でした。「労働組合活動をしている熱心な仲間たちを変った人扱いすることだけはやめたら……」と言うのが、私とその公務員に期待できる最大値でした。

その後で会った病院の労働者は新入の看護師でした。全国の看護大学から、上位5%以内の成績を上げた卒業生だけが推薦されましたが、あとで確認してみると、不思議なことに、その人たちはいずれも教授から推薦状を貰うときに、「労働組合に絶対に加入するな。お前が労働組合に加入すれば、来年からお前たちの後輩たちは、その病院に就職できない」と、厳重な警告を聞いたと言いました。一週間で行われる新入社員の研修期間に、僅か1時間を与えられた労組の幹部がどんなに熱心に訴えても、労組加入書に気楽に自分の名前を書く人はほとんどいません。むしろ、「あの人たちは病院に就職しているのに、病院の仕事なんか熱心に行っているのだろうか？ なぜ労働組合をするのか？ 人間の生命を扱う崇高な仕事、『白衣の天使』たちになぜ労働組合が？」そんな視線で労組幹部たちを見ています。人生から『昇進』という単語を早めに消してしまったその労組幹部たちの献身的な努力によって、自分たちの労働条件が決められているということ、その人たちはまったく解っていません。

午後会った公共部門の大企業の労働者たちは、「腹一杯の貴族労組がストライキをするというメディアの叱咤によって労働者たちが負った傷は非常に大きい。労働者たちはどのような自己反省をしなければならないのか？」と、私に用心深く尋ねました。「他の国にはほとんどない職権仲裁制度を拒否すれば拘束され、もし受け容れれば、その不合理な制度は永遠に改正されないのに、労働者たちはどのようにするのが良いのか？」と、選択の余地のない質問をしました。

夕方に会った非正規労働者のアジュンマ（小母さん）は郡庁舎で15年間も働いていて、「今、1ヶ月にどれ位貰うの？」と聴くと、「本俸は40万ウォンを一寸超えて、なんだかんだ合わせて60万ウォンほど貰う」と言いました。15年間働いていた間に、自分たちの労働条件について郡主さんと話しができる機会は「何年か前に、心の優しい郡主さんがおられた時に、たったの一回だけ」だと言いました。自分たちは公務員労組にも加入できませんが、公務員労組の幹部たちの助けでこのように教育も受けられ、今は直ぐにも自分た

ち同士で別の労働組合を作れるようになった、と喜んでいました。公務員であればみんな貰っている食費を私たちは今でも受け取っていませんが、公務員労組ができて、労組の幹部たちが訪ねてきて、あれこれ聴いて「何としても今度の交渉で、アジュンマたちも食費を受け取れるようにする」と約束をしてくれて、だから労働組合は良いものだということが解ったと言いました。

韓国の労働運動の間違った点について、労働者たちと直接会って話をしたこともないのに、労働運動に対する誤った嫌悪感に数十年間も慣れ親しんだ普通の人たち、自分を良心的な知識人だと思っているのに、誤った制度圏の矛盾を克服できない人たち、労働問題を正しく理解する機会がただの一度もなかった学生たち、「私の考えでは……」と言いながら『朝鮮日報の考え』を話す人たち、わざと虎視眈々と労働運動のあら探しをする人たちも、すべての人が見ているメディア媒体に教えられて言うことは、少なくとも私がいつか会った公務員労働者、病院の労働者、公共部門の大企業労働者、非正規職労働者が、少しでも、もっと人間らしく生きられるようにと、昼夜を問わず努力している善良な人たちを更に苦しめることです。その人たちの心に傷を付けるだけでなく、他の人たちがその人たちをあざ笑うようにさせます。

労働問題に対する正常な理解が、大衆的な情緒として正しく位置づけられたことが歴史上ただの一度もない社会で労働運動を批判する時には、自分の言葉がどれくらい正しいかということに劣らず、自分の言葉がどれ位正しい影響を与えているかを、もう一度考えてみることです。

参考に、私はほとんど毎日労働者と会って、私たちの間違った形態について話します。「私たちは本当に多くの反省をしなければなりません。こういうことでは滅びます。自分よりもっと苦しい状態にある労働者の苦しみと一緒に抱きしめることができなければ、小学校の道徳の教科書の原則を守ることもできなければ、私たちは社会にどのような有益な影響を与えることもできないだけでなく、自分の人生を価値あるものにすることができません……」。ひょっとして、私は労働者にこのような『嫌なこと』を最もたくさん言う人間かも知れません。昨日も言い、今日も言い、明日も言うでしょう。但し、労働者より遙かにキチンと生きている人たちが集まっている所では、言いません。それは労働者を更に苦しくし、結局、我々の社会がより良い社会に発展するのに害になるからです。

労働運動を批判しようとするなら

労働者個人の人品も重要ですが

地方を訪問すると、深夜優遇高速バスに乗ってソウルに帰ってくるのがよくあります。明け方に高速バスターミナルで降りると、タクシーを利用するしかありません。明け方に高速バスターミナルでお客を待っているタクシーは、少しでも遠くまで行くお客を乗せられればと、期待しているのは当然です。

ところが、私が住んでいる家はとても近い場所にあります。タクシーに乗り込んで私の町の名前を言うと、タクシーの運転士の中には露骨に不満を言う人もいます。終始一貫して親切に接してくれる運転士さんももちろん多いのですが、そうでない運転士さんもたくさんいます。ある運転士さんがどれくらい乱暴に運転したか、後部座席で身体の重心を取るのに苦労した時もありました。その運転士さんの後ろ姿を見ただけで、彼がどれくらい腹を立てているかを簡単に知ることができました。

そんな時、私はタクシーの後部座席に座って、このように考えることがあります。「私はこのような人たちのために20年以上も働いてきたのかな？」結論から申し上げれば、「そうだ」です。タクシー労働者の個人の人品とは関係なく、その人たちの権利が向上することが私たちの社会が発展する方向です。素晴らしい人品を持った運輸の資本家と人間的な欠陥がある運輸労働者が互いに対立しているとしても、市民たちは運輸労働者の側に立つことが、私たちの社会が発展するのに力になります。

わたしたちの社会が正しく発展する方向というのは、可能な限り、社会の構成員のみんなに有益な方向という意味です。できるだけ多くの人が幸せに生きていける社会を作っていくのに、助けになることを意味します。

労働者個人の人品が、社会的な争点の善悪を決定する最も重要な基準になるのではありません。例えば、学識と人品が飛び抜けた階級と、無学無知な作男たちが対立している構造では、百姓たちは作男の側に立つことが、私たちの社会の不合理な身分制度を撤廃し、近代国家に発展するのに助けになります。

キチンと調べれば、運転士が不親切なのは決して運転士の人品のせいではありません。構造が運転士をそのようにさせる側面があります。もし、運転士にも完全月給制が実施されていたとすれば、運転士は近いところに行くお客であっても、特別に断るはずがありません。社会問題を構造的な観点から理解する必要があります。

公務員労組のストライキに対して、自分が経験した公務員に対する不快な経験を材料にして反対する人がたくさんいます。私たちの社会の公務員たちは不親切で、高圧的で、無事安逸で、伏地不動だと言って、「このような公務員に労働基本権を保障するなど話にもならない」と言い、「公務員は自分の権利を主張する前に、民間の人たちに対する態度から変えなければならない」という声を高めています。

もしそのような公務員がいたとしても、巨大な国家権力と末端の公務員がぶつかる対立の構図では、国民たちが公務員の側に立つことが、私たちの社会にとって有益です。高位職の公務員と下位職の公務員が対立・葛藤をする時には、自分が少し不便であったとしても、下位職の公務員の権利を擁護するのが成熟した市民意識です。

私たちの社会で、特別に不親切で無愛想で無事安逸な人たちばかりが、主に公務員に任用されたはずがありません。そして、そのような公務員たちは、今の公務員労組に熱心に参加することはありません。それらは公務員労組の活動に献身的ななかまの公務員にも、全く同じように、不親切で高圧的で、無事安逸で伏地不動で、非協調的な態度を示しているはずで、誠実で純粋な教師たちが草創期の全教組の活動で先頭に立ったように、公務員労組を引っ張っている人たちの中にもやはり、誠実で純粋な公務員がたくさんいます。

労働貴族だと言われる大企業の正規職労働者の既得権を非難しながら、非正規職労働者の劣悪な労働条件を向上させなければならないと主張する人たちは、全く同じ理屈で、巨大な国家権力に対抗する公務員労組の立場を支持しなければなりません。

労働運動を批判しようとするなら

大企業の正規職労働者は既得権者か？

大企業の労働者たちの既得権を糾弾する声がしきりと聞こえます。中小・零細と下請け業者、非正規職の労働者よりも、企業経営者たちがこのようなことをしょっちゅう言います。最近では大統領と政府の労働政策の担当者たちが、大企業の労働者たちの既得権を指摘する言葉を何時も言っています。盧武鉉大統領と現政府の労働政策の担当者たちが、まるで大企業の労働者たちに敵愾心でも抱いているのではないかと思うほどです。ついには、盧武鉉大統領は全国民が見守るテレビの討論番組に出て、大企業の労働者たちに「非正規職の問題を解決するためにどれ程真面目に悩んでいるのか、胸に手を当ててみろ」と、厳粛に忠告するまでになっています。

大企業の労働者たちの既得権を指摘する人たちに、自分が直接大企業の労働組合の活動をした経験があったり、少なくとも大企業の労働組合の活動家たちの傍で見守った経験でもあるのかと、尋ねてみたいものです。大企業の労働者たちが既得権を持っているとすれば、それはどこまでも、中小・零細、下請け業者と非正規職の労働者と比較すれば相対的にそうだということで、大企業との関係においてまでも既得権を持っているではありません。大企業の労働者たちもやはり、資本の前では弱者に過ぎません。大企業の労働組合の活動家たちの中には、今でも何年かごとの進級をあきらめたまま、何時解雇されるか分からない危険の前で、ひやひやの綱渡りのような活動をしている人がたくさんいます。そのような人たちに企業の人事・労務の管理者たちは、「我々があなたを不法に解雇したとしても、最高裁の判決を受けて復職するまでには何年もかかる」と脅しながら、公々然と不利益な行為もします。

経営者たちは、大企業の労働組合が必要以上に干渉するせいで経営が上手くできない、と不平を言います。生産ラインの作業速度を調節する度ごとに労働組合の同意を得なければならないので、今のように柔軟性が要求される時代に、どうやって企業を運営することができるのか、と不満を言います。労働条件に影響を与える作業の速度調節などの問題は、労働組合と合意するのが当然です。先進国の中には、そのような内容は義務的に労使が合意するように、法で定めている国もあります。我が国では、極く少数の大企業だけでそのような事項が労使の合意によって行われているだけで、ほとんどの企業では、今でも会社固有の人事権または経営権だという名分の下に、経営者の専属的な裁量として保護されています。労働組合が経営に関与するのを非正常的だとみるのは、私たちが数十年の歳月の間、労働者を一方的にコントロールしてきた労使慣行に慣れてきたためです。

ある人は、大企業労働組合の既得権を指摘することが、労使のどちら側にも偏らない中立的な立場であるかのように考えます。しかし、労使関係のように拮抗した緊張が互いに対立する状況で、中立的な立場を言う時には、慎重に考えなければならないことがあります。韓国社会はこの数十年間、資本と権力、すなわち金持ちで力のある人たちの主張が一方的に貫徹される社会でした。そのような社会で、力のない貧しい人たちが、今やっと自分たちの主張をし始めたということです。数十年の歳月の間、金持ちで力のある人たちの利益が余りにも度を超して反映されてきた社会で、労働者を非難する言葉を発する時には、より一層慎重でなければなりません。

盧武鉉大統領が大企業の労働者と直接会って、「非正規職の問題を解決するためにどれ程真面目に悩んでいるのか、胸に手を当ててみろ」と勧めることは、意味のあることでしょう。しかし、全国民と企業を運営する人たち、保守的なマスコミが数十年間創り出してきたシステムに飼い慣らされ、客観的な判断力を失った市民たちみんなが見るテレビの番組に出て、大統領が大企業の労働者たちのせいにするような発言をすることは、正しいことではありません。自分の言葉がどれ位正しいかよりももっと重要なことは、自分の言葉が韓国社会にどのような影響を与えるかということです。

去る大統領選挙当時、盧武鉉候補が提示した多くの非正規職労働者に関する公約、週5日制導入時期の短縮、非正規職に1ヶ月当たり1.5日の休暇の付与、外国人産業研修制度の廃止と雇用許可制の導入、法定退職金制度を5人未満の事業場と1年未満の非正規職に

も適用、不法派遣防止監督体系の整備、特殊雇用形態従事者への社会保険の適用と団結権の保障などの数多くの約束の中で、現在実現されている内容がただの一つでもあるのか、本当に胸に手を当てて悩まなければならない人は一体誰なのか？

労働運動を批判しようとするなら

「平等主義が経済発展の敵」だって

韓国経済研究院のチェ・スンフィ院長が「平等主義が経済発展の敵だ」という主張をしたとマスコミが報じました。チェ院長は「80年代以降、官治の平等主義が蔓延して、長期の低成長を招いた」と主張し、政権の経済政策については「韓国経済の離陸」という表現で褒め称える一方、30大財閥に対する規制を、誤った政策の代表的な事例に挙げました。

「朴正熙パラダイムを清算するための改革が、長期の成長沈滞をもたらした」と非難しながら、ついには「経済を絶対平等思想によって運営するという宣言である憲法119条を撤廃しなければならない」という主張までしました。

参考に、大韓民国憲法119条第2項は「国家は、均衡ある国民経済の成長及び安定並びに適正な所得の分配を維持し、市場の支配及び経済力の濫用を防止し、経済主体間の調和を通じた経済の民主化のために、経済に関する規制及び調整をすることができる。」と規定しています。

全経連附属の研究機関の責任者のこのような主張は、よく解らずに言ったか、嘘か、そのどちらかの一つです。平等は経済成長に必要な不可欠な要素で、不平等が経済成長に深刻な悪影響を与えるというのは、ここ何年間かのマクロ経済学の分野の重要な研究成果です。経済を研究する人がそれを知らないとすれば、無学でしょう。知っていながらそのように言ったとすれば、卑怯です。

我が国の経済が「の奇跡」と呼ばれるほど高い成長率を記録したにも拘わらず失敗せざるを得なかった理由は、経済成長と合わせて、社会の不平等構造が深まったからだということ、韓国の経済を少しでも学んだ人たちには既に常識です。政府の経済官僚や学者が韓国経済の問題点を指摘して、「健全な内需を創出できなかった」、「消費が萎縮した」、「購買力の安定的な維持ができなかった」、「景気が浮上しなかった」と言ったのは、いずれも、韓国社会が少数の金持ちと多数の貧しい人たちで構成される不平等な構造が深まった状況を、それぞれ別の言葉で表現したものです。

この間、世界のいくつかの国が理念と社会体制に合わせて様々な形で試みてきた経済発展のモデルが人類に残した共通の教訓は、社会の両極化現象が深刻になれば、どんなに驚くような経済成長の成果も、ある朝突然に崩れていくしかないということです。

「どんな経済学も、ヒューマニズムの上に存在することはできない」という言葉があります。多数の貧しい人たちが、人間らしく、幸福を分かち合えるようにするのが、正しい経済政策だという意味です。このように「弱者の権利を保護しなければならない」という命題が人類社会で確立されたのは、単純に「人間として最小限の幸福が保障されなければならない」という古典的なヒューマニズムのレベルではなく、平等を具現することが共同体全体に有益だからです。

昨年、エモリ大学で、猿を対象にして平等意識と正義感に対する実験をしましたが、猿に餌を与えるときに不平等に待遇し始めると、群れの中から自分の餌を放棄するところまで、その不平等に抵抗する猿たちが現れたということです。何回かのその実験から得られた結論は、「正義感とは学習の結果ではなく、進化してきた本能的な特性」ということです。平等を志向する道徳律が社会に確立したのは、人類が永い歴史の進化の過程の中で、その原則を守ることが人類共同体の維持・発展に有益であるということを体得したからです。

チェ院長の主張にも正しい部分があります。「市場経済というのは、上手くやる経済主体とそうでない経済主体を差別し、できない側は脱落させ、上手くやる側はもっと支援するシステム」だということです。市場で優れた経済力を持つ財閥企業に対する支援が必要だ、という意味でそのように主張をされたのですが、その言葉は自縄自縛です。解放以降今日まで、我が国の経済政策は、財閥企業がどれ程の不実経営・族閥経営の過ちを犯しても市場から脱落しないように、金融特惠などのあらゆる支援をしてやりました。その過ちが結局、国際通貨基金から数十億ドルもの借金をしなければ国全体が倒産せざるを得ない、恥辱的な経済危機を招いたのです。

我が国で、力のある金持ちの人たちの立場の肩を持つ主張を聞くときには、その人がそのように言うことによって得る利益が何なのかを、正しく見なければなりません。

